

演題名	E T を活用した双子生産の現状と課題		
発表者 氏名	上 條 明 良	所 属	飯田家畜保健衛生所
<p>管内における牛の受精卵移植（E T）は昭和58年度から開始され、年々実施頭数が増加している。特に、黒毛和種では双子生産を目的とした2胚移植の比率が高まり、受胎率では1胚移植よりも良好な成績が得られている。今回、肉牛生産にE Tを積極的に活用し、2胚移植にも取り組んでいる管内のA地区における昭和63年4月から平成3年12月までの移植成績を分析し、2胚移植の現状と課題を検討。</p> <p>受胎率は、ホルスタイン種1胚移植で37.9%（受胎頭数11頭 / 移植頭数29頭、以下同様）、黒毛和種1胚移植で37.1%（73頭 / 222頭）、黒毛和種2胚移植で60.1%（56頭 / 97頭）であり、受胎牛の産歴が6産以上の場合や空胎日数が120日を超える場合には、1胚移植は低下したが、2胚移植では同様の場合でも高かった。また、胚のランクによる比較では、1胚移植は胚のランクに比例して低下したが、2胚移植ではすべてのランクの組み合わせで40%以上と高かった。</p> <p>しかし、流産率は、1胚移植は18.2%、2胚移植は39.5%と高かった。また、流産日が確認された受胎牛の流産は、発情日を0日として、30～50日及び195～240日の期間の発生が多かった。</p> <p>今後は、流産の原因を明らかにして損耗の防止を図り、2胚移植を活用した肉牛生産の普及・定着に向けて努力していきたい。</p>			